公開講演会

漢チェコ語辞典　－その構成と実用性－

ダビッド・ラブス

はじめに

チェコでは、大学レベルでの日本学研究が始まったのは、50年余り前ですが、学習の基本的な文献としての辞典の作成は、90年代に入ってからのことです。それまで媒介の役を果たしていたのは、ロシア語、英語の辞典類でした。1993年にやっと『日本語ーチェコ語辞典』が出され、ついで今年の2000年の３月に『漢チェコ語辞典』が発行されました。

カレル大学では、漢チェコ語辞典の作成というプロジェクトは、1994年に打ち出され、方針の形成に３年、作成自体に２年かかりました。二人の共著で、仕事の分担は、Jan Sýkora さんは、『小学漢字辞典・レインボー』の前半部分（いちへんからかたへんまで）、私は、後半部分、という分け方にしました。本格的なチームワークによる作業という点では、恐らくはじめての仕事でした。

辞典の性格、構成

書名は『辞典』となっていますが、辞典をかねた大学レベルの教材と捉えております。従って構成の上では、二通りの考え方を免れることができなかったのです。また辞典と言っても、意味の知りたい字、熟語への道だけでなく、個々の字を説明する、もっと言えば、分析するのを目的としております。理想的な場合、読者に、この辞典を寝る前の愛読書にしていただきたい、というのは半分冗談ですが、Sýkora 先生と二人とも、密かな希望を抱いております。チェコ語の書名は、『漢チェコ語学習辞典』となっています。

どういうユーザーを対象としていたのかと言いますと、日本学専攻の大学生、または日本語の初歩的な知識を持った学生です。学生以外なら、例えば日本語の独学者で、専門家として専門雑誌を日本語で読みたいという人を考えています。統計を取っていないので、そういう想像上の読者の数を挙げることはできませんが、例えば外国語学校でとか、家庭教師を雇って、日本語を勉強する人がかなりおり、日本語学習者の数は徐々に増えていて数百人に達していると想像しています。日本学科とか日本語学科が独立している大学が、二校あって、また学科としては独立していないが、日本語講座があるという大学も二つあります。また、高等学校での日本語教育も始まっているのです。

辞典の構成

辞典の構成を考えはじめた1994年に、当時カレル大学で国際交流基金の派遣で客員教授として教えてくださった東京学芸大学の名誉教授小池正胤先生に相談し、何より大事な問題意識に関しては、とてもお世話になりました。予定の字母は元々教育漢字でしたが、後に常用漢字にまで拡大することにしました。収録漢字数は、常用漢字と人名用漢字を全部入れて、それに国字と、常用漢字に含まれて

いないが品度数の高いいくつかの字も入れることにして、全部で2250字前後に及びました。

一番基本的な文献として使用したのは、上記の学研発行の石井先生監修の『レインボー小学漢字辞典』（改訂新版、1996年）で、他に参考にした辞典としては、研究社発行の、Jack Halpern 編『新漢英辞典』（New Japanese-English Character Dictionary)、また西欧で有名な Tuttle 発行の、Nelson の Japanese-English Character Dictionary は語彙の選択の上での重要な参考書になりました。

前書きとして、「日本文字における漢字」という理論的な入門、部首の入門、略語表、参考文献表を添付しました。

続いて、見出し（親字）の配列ですが、部首表は、いわゆる Nelson 式の部首配列を使用しました。その理由は、第一に技術的な面にあります。というのは、部首表を掲載するには特殊なソフトが不可欠なため、結局スキャナーでしか取り入れられず、コンピュータで図として取り扱うことになって、操作に手間がかかるためでした。第二にチェコの日本学者たちは、Nelson で育ってきているので、使い慣れていて、部首を番号で覚えているためです。部首に番号をつけるという Nelson の発想も利用し、各ページの外側の上に、当ページで初めて出た部首の番号を付けました。ただし、同じページに二つの部首が初めて出た場合は、後者を表示しました。

しかし Nelson 式の見出しの配列基準は、字義ではなく、字形を重視して、左の上から、右の下へ、と字を見るので、字を意識させる、組み立て方によって字義を覚えさせるには適していないやりかたです。そこで、見出しの配列は、従来の漢和辞典式、字の意味を重視する配列にしました。レインボーの漢和辞典などに基づいて進んでいたので、「しんにょう」、「おおざと」の部首を「しんのたつ」と「とりへん」の間「こざと」を「もんがまえ」の後に入れました以外、漢字の入れ替えの必要はありませんでした。

ページの外側の縦の部首表は、元々そのページに出現した部首にマークをつけて、さらに分かりやすく、引きやすくするつもりでしたが、この表もスキャナーしてあって、図として簡単に編集できないので、結局、学生の部首の練習のために、という名目を立てて、入れることにしましたが、なくてもいいものかもしれません。

最後に音訓索引と総画索引と五十音表を付録として付けました。

見出しの構成

次に見出しの構成ですが、そこで、漢字を三つのレベルで捉えました。それは、形（字形）と音（読み方）と意味（字義）です。

形は、字体と画数と入力可能な場合に旧字を載せました。熟語には、明朝、親字に、視覚的にもっと分かりやすくして、筆の使い方がよく分かり、またきれいに見える教科書体を使いました。

読み方は、先ず大文字で標準の音読み、小文字で標準の訓読み、標準以外の音読み、標準以外の訓読み、という順番ですが、標準以外の読み方は、非常に珍しい読みでなければ、星を付けて入れました。音訓の読み方の次に、abc 順で「名」を記号としてつけて、我々西洋人がよく迷う人名も入れました。それから、熟語の読み方とチェコ語訳とが明確に見分けられるように、読み方に傾斜の Arial 、訳語に Times New Roman のフォントを使用しました。

意味、字義は、親字が自立している場合の意味と、熟語で成り立つ意味を区別する、という理念を

基にして、熟語と熟語以外の単語を分けました。従って、熟語の部分に、自立の訓読み、自立した音読み（発する、概して）などが先立っています。特定の場合も、例えば「火の粉」のように、熟語の前に入れました。この理念の一環としては、「消し止める」「申し立てる」のような複合動詞も参考までに入れたが、それは、見出しの最後に入っています。

訓読みの複合動詞を漢和辞典に載せることについては異論があるかもしれませんが、それは、辞典（漢和辞典も含めて）を考える上での重要な論点の一つだと思います。辞典というものは、なるべく体系的、隅々まで情報を整理したものとされるべき一方で、同時にできるだけたくさんの情報を提供するはずの「道具」です。道具に求められるのは、便利さで、それによって判断されるので、ここに「理念」と「有用性」が交差するところでしょう。なお、ここでの思考の対象は、人間の精神の矛盾を反映する言語なので、限られた時間で構成の純粋さを有用性、実用性に優先させるか、その逆にするのか、簡単に解決できない難題となりました。

しかしそれに関わる問題はもう一つあります。例えば、動詞だから、振り仮名が付いている「申し込む」が入っているが、「申込書（もうしこみしょ）」は、なんらかの理由（特に使用頻度数）で入っていないという例だと、熟語の「申込書」が入ってなくても、見出しの最後に、「申し込む」を入れておけば、読者は、複合動詞にならって、二字以上熟語でも、勘で「申込書」の読み方も意味も見当がつく可能性が少し高くなるのではないか、と推測し、複合動詞もある程度入れることにしました。もっと言えば、辞典は、読者に勘、類推力を助長させることによって、その範囲を多少越えて、入っていないことにまでも届かせたいと、敢えて言いたいのです。

それに、日本人の読者の知識と態度と、外国人の読者の知識と態度の差を十分考えるべきだと考えます。外国人の読者は、日本語が話せないため、どうしても漢和辞典を、漢和辞典であると同時に、国語辞典と見てしまうのです。言い換えれば、文章を読んで漢・何とか語辞典を参考にする場合、辞典をひく回数をなるべく少なくして解読したいのです。ちなみに、Nelson の場合も、元々複合動詞である「ことば」も、振り仮名なしに並べることにしているのは、注目に値することでしょう。

つぎに、辞典の内容の主体をなす熟語ですが、親字を分かりやすく、全体的に示す、覚えさせるために、基本的な意味によってそれぞれのグループに分けて、そのグループ内の熟語で、下に付く字の画数によって並べました。その理由は、ほとんどの読者が字の読み方が分からないため、唯一の拠り所になるのが、画を数えることだからです。訓読みの熟語もここに併記させて、同じく下に付く字の画数によって、配列してあります（例１）。グループ分けは、確かに面倒な面もあり、例えば単語を、意味の多い親字で引く場合は、一つだけでなく、いくつかのグループで引かないといけないのですが、それは、仕方がないことでしょう。それより、意味の近い熟語の中で知りたい単語を引くと、その熟語と比較してもっと正確に把握できるのではないか、という推測が背景にあります。グループ分けの第二の特徴は、それぞれのグループに、親字が上につく熟語だけでなく、下に付く熟語についても「▼」（例２）のマークを付けて、入れたことです。ただしその場合は、下の字の意味のほうが強いか、またはとても典型的な場合、という条件が付いています。もっと言えば、当字の親字はこの意味でこのような使い方、という例を読者に示して、勘を伸ばそうと思ったためです。一つの例を挙げてみます。例えば、「象」と「像」との使い分けを知りたい場合、例えば「世界像」という言葉を勝手に作りたいとき、辞典で分かりやすく並んでいる、それぞれの字が下についた熟語を見比べれば、そ

の差がはっきりと出てくるのです。儀式の「儀」と正義の「義」とも、同様で、そういう例は、いくらでも挙げられます。そういう意味でも、学習辞典になっています。グループ分けには、かなり苦労して、どこに境を置くか、細かく分けるのか、それとも近いグループを一つに統一するのか、時々迷いましたが、結局、むしろ統一することにしました。特に具体的と抽象的なレベルを一つにまとめることが統一の一つの基準でした。そのため、絶えず何冊の漢和辞典、上記の新漢英辞典を参考にしながら進めました。また、グループの配列に関しても、優先を考えて、元々の意味、それとも一番基本的な意味のグループを最初に位置づけようとしました。そのため、漢和辞典を比較して、最初に挙げられた意味を元々の意味と把握しました。

グループ分けが決まったら、次に語彙選択という一段下のレベルに入りますが、完全に小学生むけの熟語でなければ、レインボー辞典を基に、必要に応じて他の辞典から熟語を選んで、加えていきました。仕事が進むにつれて、熟語を見逃しているのではないかという懸念に襲われましたが、結果的に、規模がそれほど変わらなかった学研の『漢和辞典』に出ていた熟語のほとんどを入れました。出版社の製本の都合で、ページ数は700－800 まで、と限定されていたので、それを意識しながら、語彙の選択を行ないました。

次に品詞の表示です。この問題には特に時間を費やしましたが、講談社の『日本語大辞典』が一番重要な参考書になりました。並べた熟語は、先ず名詞、続いて形容詞として訳して、動詞としての使い方があった場合、かっこに「+v」（他動詞）「+vi」（自動詞）と印を付けました（例３）。同じ意味で名詞も形容詞もあった場合、品詞をまとめるのではなく、意味でまとめました（例４、７）。形容詞は、ハンドアウトでご覧のように、「な」とか「の」とかが不可欠でない場合は書き添えない、「的」の場合は、「楽観的」のような本当に典型的な場合は表示しました（例５）。それは、副詞としても使えるのに、チェコ語では副詞の意味を書かないからでした。つまり、二通りの使い方があっても一つだけ載せるのはアンバランスだから、という理由ですが、例えば「概して」、「概ね」のような副詞を入れました。

動詞は、「する」がつく条件によって、その表示を決めました。「発する」「模する」「沈潜する」ような場合は（例６）動詞として表示して、サ変動詞の場合は、自動詞か他動詞という選択になります。これは、また漢和辞典の枠を超えるのですが、動詞の transitivity は、日本語とチェコ語とが違う場合が多いので、文の中の主語を示すため、文の文法的な理解のための重要な手段なので、その印を付けることにしたわけです。実は、元々は、熟語のままの形で、名詞と同時に形容詞としても訳せる場合は、チェコ語で名詞としてだけ載せて、形容詞を何らかの印で表示しようという発想もありましたが、チェコ語の問題として、その名詞から派生した形容詞がちょっと違う、という例がいくつかあったので、チェコ語の専門家と相談の上、形容詞もちゃんと書き表すことに決めました。

チェコ語の部分は、やや専門的な意味も含めて書き並べました。その最大の理由は、研究社の新和英大辞典を元にしたので、たくさん並べてある意味を簡単に省略してしまうわけにはいけないという意識でした。同義語、類義語も並べましたが（例７）、それはコマで区別して、違う意味の言葉はセミコロンで区別して、二語以上の同義語的な言い方の場合は繰り返す印として斜線を入れました（ハンドアウト参照）。意味的な背景、分野、文脈を表すために、小さいフォントを頻繁に使用していました（例８）。ところで、チェコ語訳をしたとき、母語の知識の欠陥によく悩んだり、チェコ語の国

語辞典の欠陥にもよく出会い、チェコ人の国語学者はいったい何をやっている、とよく疑問に思いました。

ソフトの面

ソフトについては、何回も触れましたが、日本語版の Win 95 の Word 7.0 で、最終的な編集の時に98版の Word 7.0 を使って、やっと日本語と同時にチェコ語も簡単に打てるようになった一方で、辞典作成用のソフトの欠如によく痛感させられました。特に部首の扱い、旧字、書く順の表示に当惑しました。

おわりに

作成中は、国際交流基金の派遣の講師、今井先生とその前任者五十嵐先生のお世話になりました。グループ分け、語彙の選択も、個々の単語のグループごとの配列などは、相談していましたが、時間と場所が制限されるという不都合な環境だったので、少し後悔が残ります。個々の見出しで、語彙の選択とか、グループ分けをめぐっての問題とか、具体的な例で絶えず日本人の専門家との討論が必要であると同時に、辞典の構成の上、我々の経験、視野が届かないところの相談の必要性もよく痛感したのです。

数年経ったら、再版、徹底的な改訂新版を考えていますので、どうぞ、あらゆるのコメント、批判、ご意見でも、ご遠慮なくお聞かせ下さい。

最後になりましたが、このプロジェクトは、国際交流基金の援助により実現できたことを記し、ここで、改めてお礼を申し上げたいのです。

『漢チェコ語辞典』、David Labus、Jan Sýkora共著、Praha、Paseka 2000

ハンドアウト

はじめに

日本語ーチェコ語辞典、Dr. Ivan Krousky著、Praha, Paseka 1993、約２万５千語数

チェコにおいての辞典作成の条件

辞典の性格と構成

性格　辞典と同時に大学レベルの教材

字を説明する、意識させる愛読書

構成　参考書、部首表、部首に番号をしての配列、親字の配列

総画数索引と音訓索引

見出しの構成

字形　教科書体で親字、明朝で熟語

読み方　音読み、訓読み、標準以外も、人名での読み方も

字義　熟語とそれ以外、特に自立の単語を分ける

辞典自体の捉え方

親字のそれぞれの意味によってのグループ分け、その難点は、区切り

熟語の配列の例

例１　火口 *kakó* kráter sopky *(310p)*

higuči ohnisko požáru

火山 *kazan* sopka

火元 *himoto* zdroj ohně

火打ち石 *hiučiiši* křesací kámen, pazourek

親字は、下についた場合も、「▼」のマークを付けて、入れました

例２　▼病状 *bjódžó* stav nemoci/pacienta *(324p)*

語彙選択は、初歩的より、むしろ専門的で分かり難い単語を

品詞の表示：

例３　沈滞 *čintai* stagnace; malátnost; ochablost trhu *(+vi)* *(282p)*

例４　静穏 *seion* klid, klidnost, klidný, vyrovnanost, vyrovnaný *(566p)*（類義語）

形容詞

例５　非凡な *hibon na* nevšední, vynikající *(566p)*

在外の *zaigai no* v zahraničí se nacházející *(110p)*

動詞

例６　発する *hassuru* vydávat hlas, kouř, rozkaz; emitovat; vystřelit; vyslat; vyjet; oznámit *(347p)*

模する *mosuru* imitovat, kopírovat *(258p)*

沈潜する *činsen suru* klesnout do hlubin; být pohroužen *(282p)*

自動詞、他動詞の表し方

チェコ語訳の並べ方

例７　横着 *óčaku* parazitní vychytralost, nečestnost, nečestný, zlý; neurvalý, drzý; lenost, líný *(p260)*

例８　沈める *šizumeru* potopit, poslat ke dnu; zabořit se do křesla; klesnout na dno společn. *(282p)*

ソフトの二面

日本人の専門家の必要性

終わりに

参考文献

漢和辞典:

『広漢和辞典』、諸橋徹次、鎌田正、米山苑寅太郎編、大修館書店、東京1988

『漢和大辞典』、藤堂明保編、学習研究社、東京1990

『漢和辞典』、藤堂明保編、学習研究社、東京昭和55年

『レインボー小学漢字辞典』、石井圧司監修、改訂新版、東京平成８年

『新漢英辞典』（New Japanese-English Character Dictionary)、Jack Halpern 編、研究社、東京1990

『The Modern Reader's Japanese English Character Dictionary』(最新漢英辞典)、Second revised edition, A. N. Nelson, Tuttle, 1974

『Japanese Character Dictionary』, Mark Spahn, Wolfgang Hadamitzky, Nichigai Associates, Tokyo 1989

言語辞典:

『New Japanese-English Dictionary』, Fourth Edition, 増田綱編、Kenkyusha、Tokyo 1974

『日本語大辞典』、カラー版、梅棹忠夫、金田一春彦、坂倉篤義、日野原重明編、講談社、東京1989

『広辞苑』、新村出編、岩波書店、東京、1994